
 書 評

T. D. J. Chappell: *Aristotle and Augustine on Freedom: Two Theories of Freedom, Voluntary Action and Akrasia*,

St. Martin's Press, New York, 1995, xii+213 p.

上 村 直 樹

著者 Timothy D. J. Chappell は、James Mackey および David Wright の指導のもとで、本書の原型となる学位論文によって University of Edinburgh から学位を取得し、現在 University of East Anglia における哲学の講師である。本書はその最初の著作として著され、アウグスティヌスの意図的行為と自由についての思索の意義を、アリストテレスの行為の哲学との比較を介して明らかにしようとする試みである。

さて、著者自身が序文において述べているように (p. xi)、両者を並べて著作の表題として掲げ、その自由論に関して比較検討を行うことは一見奇妙な試みであると看做されるだろう。然し、アウグスティヌスの哲学と新プラトン主義との連関が学説史的にも問題史的にも綿密に取り扱われ、それに対して、アリストテレス哲学との連関が一部の研究を除けば、あまり顧みられてこなかったという研究史上の事実をもってその連関が取り扱われるに値しない課題であると考えるのは短絡的であると思われる。むしろ、アウグスティヌスがアリストテレスに言及する際には、その哲学への拒否を表明したにも拘わらず、両者の思索の類似点が明らかに見い出されるからには、その類似の因って来る問題性を解明する営みに取り組むと共に、その作業を介して新たな視点を確立することを目指すべきである。本書の著者もそのような立場から、(i) 両者は、自由の存在を証明することよりも、その条件を記述することに一層の

関心を有する、(ii) 意図的な行為を記述することによって、行為の自由を記述する、(iii) 自由への信を棄てることによって、意図的な行為への信を棄てるという結果をもたらされる一、という両者に共通と考えられる自由論の土台を踏まえて、アウグスティヌスの自由と意図性に関する思索の独創性を明確にしようと試み、次のような構成をとって論を進めている。序文。第1部 アリストテレス：1. 意図的行為の様々な限界。2. 自由，能力，知識。3. 実践推論。4. アクラシアの諸形態。第2部 アウグスティヌス：5. アウグスティヌスに於ける意図性と責務。6. 意志 (voluntas) と意図的な行為。7. 善き意志と善き生。8. 悪しき意志と悪の神秘。このように本書は、両者を同一の視角から検討する論述がその大部分を占めているので、先ずこの章立てに従って著者の論旨を通覧する。その上で、本書の提出する結論を紹介しつつ、その内容について評を加えることにしたい。

先ず著者は、意図的な行為についての肯定的、及び否定的な条件が相互に系として成立していることに着目する (第1—3章)。考察の出発点として、*EE* 1225b7-10: *NE* 1111a22-24 の2箇所を引用し (p. 4)、そこで語られている、意図的行為に関する否定的な2条件 (a) 強制的ではない、(b) 無知においてではない、を抽出すると共に、第3の条件 (c) 非理性的ではない、がその立論に従う限りで要請されると考える (pp. 54-55)。この3条件、及びそれに対応する肯定的な条件—自由、能力、知識—について、テキストに即して考察を加えた上で (第2章)、アリストテレスの見地においては、仮に (a) — (c) の条件を満たす行為があるならば、それが意図的な行為なのであり、ひいては自由な行為の存在が認められることになる、と結論づける。つまり、自由な行為とは、その定義に依る限りで意図的な行為に他ならないのであり、意図的な行為でないような自由な行為は存在しないのである (p. 87)。そこで問題となるのは、「何びともみずから好んで下等な人間たるはなく」 (*NE* 1113b15) という一節が言及する、いわゆるアクラシア (無抑制) の現象が、果たしてアリストテレスの意図性の理論と両立するのかということである。この疑問について検討する第4章において、著者は先ず、アクラシアに関する現代の論争を参照して (Cf. R. Hare, D. Davidson, J. C. B. Gosling), 「充全な」 (full) アクラシアについての必要十分条件を6つ提起し (p. 95)、それらが同時に成立することは論理的に不可能であるとして、充全なアクラシアの存在を否定する。次いで、*NE* 第7巻におけるアクラシア論を分析し、そこにおいて呈示されているのは、充全なアクラシアが生じないことに

ついでに帰納的な論証であるに過ぎないことを明らかにする。そこで著者は6つの必要十分条件に依拠し、「部分的な」(partial) アクラシアを枚挙することによって、アリストテレスの意図性と自由な行為に関する説明に対しては、アクラシアの現象がいかなる脅威ともなり得ず、いわば興味ある補遺となっていることを示すのである。

さて、第2部においても、アウグスティヌスの自由論への分析を同様に、意図的行為に関する否定的な条件の検討から着手する。先ず第5章において、行為の意図性に関する条件を、初期著作 *De lib. arb.* を舞台にその否定的な側面から明らかにしようとして、強制と無知という古典的な2条件を呈示する (pp. 125-127)。次いで問題となるのは、アウグスティヌスがアリストテレスと同様に、この否定的な条件に対応する肯定的な条件を呈示しているのか、ということである。*De duab. an.* 14のテキストに依拠して、その条件として著者は、(1) 当該の行為が行為者自身のものである (2) 行為者は別の仕方でも行為することが可能である、を挙げ、アリストテレスの理論との類似性を指摘するのだが (第5-6章)、それでは、アリストテレスが呈示した否定的条件(c)非理性的ではない、に類似の条件が何かあるだろうか、また、(c)に対応している肯定的条件—意図的行為における実践推論の役割—を説明する装置が何か見い出されるだろうか。この疑問に対して、先ず第7章において、アウグスティヌスもまた、意図的な行為を何らかの善へと向かうべきものであると捉えている限りで、行為の rationality についての理論を呈示していると考えられる。次いで、第3の肯定的条件に対応する要素として著者が想定するのは、アウグスティヌスとその存在を認めている *mala voluntas*、即ち、邪な悪行 (wilful wrongdoing) に特徴付けられる、善きものの代わりに悪しきものを意図して選択すること、或いはそうした行為である。従って、アリストテレスと類似の3条件がアウグスティヌスの行為論のうちに見い出されることになり、アクラシアの有する問題性もまた継起することになる。そこで、第8章において、邪な悪行の存在が聖書において語られているとしても、あらゆる欲求は何らかの本来的に善いものに対する欲求である以上、如何に両者を調停することが可能なかを論ずるのである。そして、アリストテレスにとって意図的行為が、常に必然的に、上記の3つの条件を有するのに対して、アウグスティヌスにとっては、これら3つの定式化された条件に対する反例のあることが明らかにされる。即ち、邪な悪行を非理性的ではあるが、意図的な行為として捉えるのである。それ故、この把捉を以て著者は、先行する古典期の行為論との相違と看做し、アウグスティヌ

スの自由と意図性についての理論の独自性を捉えることができる、と結論付けるのである。

さて、以上本書の行論を概括したので、次いで、簡潔な仕方ではあるがその内容に対して批評を加えてみたい。

著者の試みは、従来等閑に付されてきたきらいのあるアリストテレス哲学との連関を、とりわけそのアクラシア論と比較検討することによって、アウグスティヌスを voluntarist として捉える伝統的な理解に変更を迫り、アリストテレス、或いはその系譜に連なる人々のように rationalist とする主張を提出する。なる程、意図的行為の本質についての説明は、自由な行為の本質についての説明にとって必要十分条件を満たす、という基点を定めることによって、一貫したテキスト解釈を呈示し、矛盾する思索の混合体であると看做されてきたその自由論の重心を明らかにすることが可能になっている。そして、アウグスティヌスの mala voluntas を巡る探究こそがその自由論における核心であり、古典期の自由論のはらむ問題性を受け継ぐものである、という見解は説得的であると思われる。mala voluntas 論においてアウグスティヌスが呈示しているのは、不完全な説明なのではなくて、その説明が必然的に不完全なままにとどまる理由であり、それは、mala voluntas の根源が nothingness であるが故に、という見解も示唆的である。確かに、アウグスティヌスの行為論が、すべての意図的な行為はそれが何らかの善へと必然的に方向付けられているという意味で rational である、という根本に立っており、また、mala voluntas の対象が存在しないものである以上、それについての説明は必然的に不可能となる、と語ることはできよう。然し、その論述に続いてマニ教の二元論との対峙を取り上げ privatio boni について論ずるのは相応しいとしても、それが mysterium であるという説明にとどまるのは不充分であろう。また、ストア派の影響が多分に認められる初期の自由論から、どのようにして人間存在の不完全性を受容する理論へと展開したのか、について、単にその足跡を辿るという仕方ではなく、その思索に内在する必然性において考察することも求められるところである。それは更に、パウロ思想の積極的な受容という、キリスト教思想史におけるパウロ復興の試み、アウグスティヌスの恩恵論の形成にとっての重大な契機についての考察を要請することになるのではなかろうか。

とはいえ本書は、アウグスティヌスの自由論を、古代哲学との一貫性を保持しつつ

も独自の意義を有する成果として明快に描いたことによって、今後の研究が顧みるべき新たな視点を示していると思われる。というのも、仮にアウグスティヌスを rationalism の伝統のうちに据えるという著者の主張が妥当であるとするならば、その自由論についての従来解釈はその前提から問い直されることになるからである。更に本書で呈示された視点は、キケロ、あるいはストア派の行為論との比較に際して示唆的であり、それによって、アウグスティヌスの自由論を、古代哲学の系譜に連なる思索としてよりよく理解するための展望を我々の前に開くのではないかと思われる。

Brian, Stock: *AUGUSTINE THE READER, Meditation, Self-Knowledge, and the Ethics of Interpretation*

The Belknap Press of Harvard University.

Press 1996 p. 463

林 明 弘

われわれにとって、アウグスティヌスは多くの著作を残した書き手であるが、さまざまな書物の読者でもあった。著者はアウグスティヌスをこの観点から見る。アウグスティヌスは誰にもまして自分の著作の読者であった。彼は読者の反応を考えながら書くだけでなく、長期にわたって一つの作品を書いている最中に、すでに読まれた部分についての誤解を聞き、それを解くために書くこともあった。晩年の「再論」で行なったようなことは何度もあったのである。

そしてもちろん聖書の読者であった。そしてこれは聖書の場合に限らないのであるが読者であることは同時にその探究者でもあり、解釈者でもあった。しかし聖書ほどアウグスティヌスが真剣に探究し、解釈した書物は他にはない。ヴェルギリウスを読んで涙を流し、キケロの「ホルテンシウス」を読んで知恵の探究に目覚め、アリストテレスの「カテゴリアエ」を読んで容易に理解し、新プラトン派の書物を読んで内面への道を学ぶという異教の書物の読書体験はさまざまな影響を与えながらアウグスティヌスのなかで聖書を読むことへと収斂していった。

しかしながらアウグスティヌスは単に読者であっただけではない。自分が読んだ聖